

うちの
みんな
読んでね



すでにわたしは光の中

慈光はるかにかぶらしめ ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたまふ 大安慰を帰命せよ (浄土和讃)

人はいつの時代も老若男女を問わず、暗さや冷たさを感じる生活には耐えられないものです。誰もが明るさや温かさを求めています。ドイツの文豪ゲーテも臨終の際には「もっと光を」と呟きました。これは心が暗くなったためか、周りが暗くなったのでそう願ったのかはわかりませんが、何れにしても光を求めたことに変わりはありませんし、人は常に光を求めているということです。

こんにち、平和で豊かなこの日本で、年に三万人近くの自殺者が出ていることは驚きです。それも中学生高校生などが自らの人生に絶望して命を絶つことを見るととても悲しくなります。自分の心に輝きを与えてくれる光に恵まれなかったら、不安と悲しみ苦しみの闇夜をさまよわなくてはならないでしょう。

暗い心を明るくし冷たい命を暖めてくれるのは「み仏の光」です。阿弥陀如来は不可思議光仏とも言われ、人間の悲しみに底がないからこそ、無量寿の命をもって冷え切った私たちの心に温かな仏の命を注いでくださいます。人間が常に不安と迷いを繰り返す暗い心だからこそ、仏の智慧の光は私たちを目を離さず照らし続けて、心の闇を破りついには救いにとってくださるのです。

苦悩の人生に絶望する日もくる私たちに、どんな状態にさらされても喜びの見える世界を開いてくださるとしたらそれはみ仏のひかりです。必ず私を見捨てぬ大悲が注がれていることに気づけば、涙の中からもみ仏のお手元の確かさに気づかされて安心できるのが仏法の喜び「法喜」です。

私たちは普段気づかないだけで、限りなき慈愛に満ちた光に包まれているのです。その光に導かれて、今生の命終われば「無量光明土」の浄土に生まれて仏と成らせていただく身です。「もっと光を」と訴えなくても、光は私の上に届いていたのでした。すでに私は光の中なのです。(孝雄 出典「御堂さん」)

ほんがん
本願とまきまて

うたがひ
疑うこころなまへ

もん
聞というなり

◆聖人はお手紙で門弟らの疑問に答えられ、臨終の正念を祈り、有念・無念を沙汰することは、浄土真宗の法義にかなわないことを教示されています。

真実信心とは、阿弥陀様が悩み苦しむ私たちを、「必ず救う、我にまかせよ」と慈愛に満ちた願いが喚び声となり、その声をそのまま聞くことで私たちの信心となります。自力のはからいの心が廃れ、願力にまかせるといふ心相です。「信心をいただく」といわれるのは、本願の上に既に用意されてあった信心だからです。南無阿弥陀仏の名号は、衆生の心に現れて信心となり、口に現れて称名となるのです。

また聖人は、平生に真実信心を獲た時に、往生成仏に必要な事柄が衆生にて全て満足する、と理解されます。平生に阿弥陀様の光明に摂め取られ護られていますので、間違ひなく往生することが定まっております、捨てられることがあります。臨終の時に往生ができるかどうか気にかけてしまわぬよう、平生のお聴聞が大切な所以です。

聖人以前の浄土教では、往生の契機として臨終時に仏・菩薩の来迎による引導が待ち望まれました。聖人は、臨終来迎を期待するのは、自力往生を願う人のことであり、私たちの往生の因も果も阿弥陀様の仏願力によつて成ぜしめられ、その本願成就の救いは今ここに届けられているので、臨終来迎を待つことも頼むことも必要ないとされました。もし亡くなられた人が念仏にご縁がなかったのなら、まず私自身が念仏の教えを喜び、仏法を後世に伝えたいものです。(引用「月々のことば」)

教えて、お坊さん ⑬ 「お坊さんになるってどんな修行をするの？」 ……

少し前、「一般の人でもお寺に入ることができるんだね?」とか「お坊さんの修行は誰でもできるの?」などと聞かれることがあった。宗派・教団によってこれは様々で、戒律や行のない真宗はもっとも一般在家に近い。

といっても我が本願寺派では、僧籍を得る得度式にあたっては10日間、京都の研修道場・西山別院(写真)で外界と隔離されて早朝から深夜まで詰め込みの習礼が必要である。習礼に入るには事前に二日間の講習会と考査が必須。それらを通るためには、正信偈や領解文の暗譜をはじめとした読経、内陣での作法、装束の着用、仏具の名前や真宗の用語、及び仏教や親鸞聖人の教えの基本的理解などを、事前にある程度勉強して臨まなければならない。

昔はほとんど何も予備練習もなく、行けばなんとかなると言われて習礼に来た若ボンも少なくなかったが(自分も)、今はより中身の濃く実践的なレベルになっている。そして年代も学生から中高年の方、女性も相当数おられ、一般在家出身の方も半数を占めるようだ。聞けば親の後継ぎだけでなく、様々な事情や志を抱えている方も来られている。

得度自体は厳粛な体験だが最初の一步にすぎない。それぞれの事情や環境の中で、日々の勉強や現場での実戦経験をどのように積み重ねて行くか、同時に僧侶としての自覚を常に問い続けることが重要となる。なお、住職になるための資格は、法話の勉強も含めてさらに8科目を座学で通り、教師教修というまた10日間の研修を経なければならない。



初めまして、木村共宏・釋權空（かいくう）です。

◆一昨年より林住職に教えを頂き、昨年10月に京都の西山別院にて10泊11日の習礼を経て、得度させていただきました。簡単ながら自己紹介させていただきます。

私は昭和47年に神奈川県相模原市で生まれました。4歳で函館、7歳から高校までを岡山で過ごしました。その後、東京大学で原子力工学を専攻し、卒業後は3年前まで三井物産に18年間勤務し、海外ビジネスに従事しました。

福井県にはもともと地縁はありませんでしたが、今や10回を数えた鯖江市地域活性化プランコンテストを2009年よりお手伝いするご縁を頂き、これに加えて昨年からは鯖江市の地域おこし協力隊を拝命しております。そして更に林住職とご縁を頂くことになり、このたび仏門に入ることとなりました。

現在は企業顧問・コンサルティングと地域おこし協力隊、そして僧侶の3足の草鞋を履いております。鯖江市民として河和田に居住しつつ、月の半分は出張で飛び回っております。

一見、支離滅裂な人生のように見えますが、不思議と自然な流れでここに至りました。ビジネスの世界もお坊さんの世界も根底に流れる大事なものは同じですので、自分の中でも全て違和感なく繋がっております。

例えば前職時代から「頼まれたら断らない」をモットーとしております。「頼りにして頂いた以上、その気持ちに応えるべし」との教えを大切にしてきました。目先で見返りは期待できなくても、人としてまずは斯くあるべし、です。

ですが、長い目で見ると何が起るかわかりません。事実、依頼に応え続けていると、予想外の展開が生まれ、人生の幅が広がることが多くありました。あまり打算的になってしまうよりも、いったん受けとめてみる方が人生は豊かになります。「ご縁」を大切にすることは、自分の社会人生活を通じての大きな学びとなっています。

今後は仏法の理解を深め、忘れられがちな古くからの教えに光を当て、自分の関わるビジネスや地域活性等の世界にもより一層貢献できる僧侶として頑張っていきたいと思っております。そして何より、これからのご縁も大切に、それがまた未知の広がりをもたらしてくれることを楽しみに、日々精進して参る所存です。

どうぞよろしくお願い申し上げます。



林住職(右)に習ってお勤めを練習する木村さん＝鯖江市杉本町の報恩寺

福井新聞11月17日掲載記事より

山田さんと妻が得度してしばらく、知人から「坊さんになつたらよさそうな男がいる。面倒みてやってくれるか？」との電話。やりとりして結局二年続けて得度の勉強・お世話をさせていただくこととなった。望外のご縁。忙しい仕事の合間によくこなされたと思う。今は少しずつ法務に同行しつつ、有縁の皆様にはご指導の程ぜひ宜しくお願い致します。(住職 暁裕)

「今年毎日、「一日一褒め」しよう」

◆友人から『ほめ育講座』というのがあるから一緒に参加しない?と誘われました。どうやら、ほめるということを学ぶ講座のようです。介護の仕事上、いろんな人と組んで業務をすることが多いことから、日々どうしたらスムーズにコミュニケーションが取れるのか、アドバイスが伝わるのかと悩むこともあり、すぐ受講することにしました。

「人はほめられるために生まれてきた」そう講師の方が言われ、思わず「そうだったのか～」と納得。人をほめるということは存在を認めることだそうです。無理にするものでもないし、勿論お世辞や下心で使うものでもありません。「いいところ無かったらほめられない」「ほめると調子に乗る」なんて思う人もいます。私もそう思っていました。だからほめると口がむず痒くて...



講座では皆、受講した全員からほめ言葉のシャワーを浴びました。「えー、私ってそんな風に思われてたの?」とも思いましたが、ほめられ続けるとニコニコの笑顔になり、疲れもどこかへ飛んでしまいました。ほめられて嫌な人はいない。そしてほめるということは、その人をよく見ているということ。しっかり見ている人がほめると、人は成長するそうです。それは生きていく糧ともなるものです。

簡単そうですが、慣れないとなかなかできません。職場で、後輩の男性にほめ言葉を書いたカードを渡すと「えっ?」と言われ、その後照れ笑いされました。まだ始まったばかりの「一日一褒め」、今年これを実践していきたいと思います。(C)

本年も宜しくお願い申し上げます。

▼前々号でも報告の、山田靖也さんの善性寺(梅浦・宿)住職継職法要が九月末に営まれ、紹介者として仕切り役を担いました。短い期間に関係者らと何度も準備を進め、なんとか無事に円満に終えることができたホッとしました。彼らはお寺のことも在所も初めてのスタート。しばらくは頑張りどころですね。

そして十二月九日夜にご往生された西光寺御前の通夜葬儀は丸六日間に及び、様々な段取りや采配に関係者皆で明け暮れました。合掌。

▼十一月初旬、左膝の半月板断裂に見舞われてしまいました。医師からは入院手術を勧められましたが繁忙期でかわず、椅子など使いながらの法務。十二月十日には祖母・白寿院釈尼恵味の十三回忌も務めました。

一月下旬から入院手術で二週間ほど留守になる見込みです。このかんご門徒の皆様にはご迷惑おかけすることになりますが、何卒ご理解ご協力宜しくお願い致します。(S)



今年度
行事予定

- ・お年頭：1月2日(祝火)終日
- ・永代経：3月21日(祝水)昼3時
- ・七日盆：8月7日(火)終日
- ・本盆：8月15日(水)終日
- ・報恩講：9月23日(日)昼3時、夜7時

どうぞ
お参り
ください